



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

グリーン・ツーリズム に立ちほだかる壁

ヨーロッパのアグリツーリズム(伊)やルーラルツーリズム(英)に源をなすグリーン・ツーリズムは、「緑豊かな農山漁村地域において、その地域の自然や文化、産業、暮らしなどを、都市と農村の人々が交流を通して楽しむ滞在型余暇活動」と訳されていますが、都市と農村の距離が近いこと、長期休暇がとりにくい労働環境にあること、個人旅行でなく団体旅行の形態が好まれることなど、日本人の価値観や生活様式の違いもあって、ヨーロッパのように都会の人が、農村に長期滞在をするのんびり過ごす風潮は日本には殆どなく、そのことがネックになって、働き過ぎ日本人の反省を込めて大きな期待はされていないものの、グリーン・ツーリズム運動

はひとつの壁に当たっているようです。

一方、効率万能、規格量産化、人間関係の希薄化などに疑問を持ち、自然や人間とのかわりて人間性を回復しようとする、スローフードやスローライフに関心が寄せられるようになり、需給サイドである都市住民は農山漁村を目指そうとしています。供給サイドである農山漁村に住む人たちの意識は依然として低く、そのこともネックになっているのです。

私は長年農山漁村地域に住み、グリーン・ツーリズムの必要性を地域の人々に説いてきましたが、次の五つにおいて越えがたい壁を感じています。

① 時間的な壁

自然や天候に左右される農家や漁家は、今でこそ週一程度の休みを取っているようですが、「朝は朝星、夜は夜星」とか、「一月火水木金金」といわれるように、三K(きつい・汚い・金にならない)産業を自負し、そのため時間的余裕を感じられない人が多いようです。グリーン・ツーリズムでやって来る都会の人は、金と暇があつて遊びに来るという考え方があつて、そんな人には付き合いきれないと思つているのです。

② 空間的な壁

農山漁村の民家は、冠婚葬祭があれば大広間で使えるよう、襖と障子や板戸で仕切られていて、間仕切りとドアでプライバシーを大切にす都会の人には、建物の構造が今一受け入れられないと思つています。その民家をわざわざ改装して水回り(風呂・トイレ・洗面所)や間仕切りを直すには相当な資金が必要であり、資金投資をしても果たして回収できるかどうか、分らないという不安が先に立ち意欲が湧かないのです。

③ 心理的な壁

グリーン・ツーリズムは地域ぐるみでないと上手く行きません。農山漁村は手つなぎの連帯を重視するあまりによそ者を入れない封建的な考えがあり、また兼業の農家や漁家が増えたため考えや行動がまちまちで、統一した地域ぐるみという意識が湧かないのです。農山漁村の暮らしや生産活動そのものが広い意味での観光になるなんて思わないし、農繁期の繁忙や農地への立ち入りなど、暮らしを体験させるといった価値観がないようです。

④ 資源的な壁

農山漁村は自然が豊かというけれど、最近

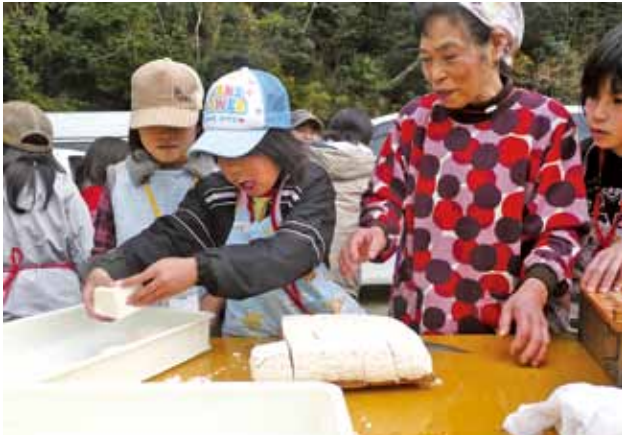
の都会の造られた景観に比べると、街路灯の少なさ、川のコンクリート構造、電線の乱雑さ、行き届かない掃除、公衆トイレの汚さなど、かなり劣っていると思いがちを感じています。また都会の人へ出す料理は肉や魚などご馳走を出さねばという先入観があったり、田舎料理やもてなしの心を否定しているようです。「田舎には何もない」と思う気持ちも強く、せっかく持っている地域資源や培われた技を誇りに思う意識が欠如しているのです。

⑤ 支援的な壁

地域活動を支援する行政や団体には、残念ながらグリーン・ツーリズムを理解して支援する人や団体が少ないようです。最近の特区制度や政府の地域活性化支援事業を積極的に取り入れ、グリーン・ツーリズムに取り組み地域も増えてきましたが、財政的支援、人的支援、情報的支援、人的支

援、さらには交流支援を行わなければ、折角取り組んでも長続きしないのです。

最近私たちの身の回りでも、農林水産物活動(産直市・直売所・ふるさと宅配便)、各種イベント、農業農村・漁業体験活動、学校教育における食育活動、自然体験活動など、都市と農山漁村の交流が活発になってきました。またエコツーリズムやニューツーリズム、ブルーツーリズムという言葉も聞かれるようになってきましたが、グリーン・ツーリズム



ふたみグリーン・ツーリズム「豆腐づくり体験」

ズム本来の目的である農家民泊など、「滞在型余暇活動」にはまだまだ程遠い距離にあるようです。

それでも私の町を例に取るだけでも、翠小学校周辺で行われているホテル保護活動や観光イチゴ園、ピザ釜体験、シーサイド公園周辺で行われているシーツーリズムなどには沢山の人が訪れ、疲弊しつつある地域が、交流によって多少なりとも活気づいてきました。

また私の友人である西

条市丹原町でちろりん農園を経営する西川則孝さんは、自宅横に小さなゲストハウス「第二緑開所」を設け、国内外から農業の研修生を受け入れ、小さいながらも滞在型の交流を続けています。

何でもないと思える人間牧場の五右衛門風呂での入浴や足湯に感動する都市住民の姿を見ていると、グリーン・ツーリズムはその気になれば誰でも取り組めることなのです。前述した五つが高いと思っっている心のバリアを低いと感じるような意識改革ができ、誰でも一歩前へ、もう一歩前へ、そしてもっと前に進む勇気があれば、地域は生まれ変わることでしよう。頑張れグリーン・ツーリズム。頑張れ田舎人。

グリーン・シー
エコにアグリと ツーリズム
色々あるが 似たようなもの
よそ者を 入れないなんて ばか者だ
若者ならば 簡単受け入れ
新しい 風が吹かねば 共倒れ
住んでる地域 未来の子らに
少しでも 金になること 考えろ
儲けりゃみんな その気になって
(若松達一 笑売啖呵より)